

〔研究論文〕

東北タイにおける家畜飼養の変容

—— 牛と水牛から見た農村経済 ——

津 村 文 彦

1. はじめに

東北タイの地方都市コーンケーンから長距離バスでバンコクへ向かう。バスは国道2号線を南下し、車窓には東北タイの景色が浮かぶ。目の前には灌漑設備の整っていない天水田やキャッサバ畑が広がり、いかにも東北タイらしい風景に見とれていると、道路脇で十数頭の白い牛の群れが草を食んでいるのがちらりと見える。この辺りにも牛を飼う農民がいるものかと車窓を眺めていたら、脇の水たまりから水牛の顔が飛び出ている。さらには柵で囲まれた牧草地に数十頭の牛が放牧されている風景まで現れた。東北タイでは3-4頭の牛や水牛が主に農業労働あるいは蓄財のために飼養されるという報告はこれまでにないとなされてきた。だが労役や貯蓄のみが目的だとするならばこれほど多量の家畜を飼養する必要があるだろうか。また東北タイは「典型的な天水田」農業地域としてこれまで描かれてきたのではなかったか。本論文はこうして浮かんだ疑問を一つの出発点とし、家畜を通じた東北タイ農民の生活を描くことを目的とする。

タイのGNP比で農業収入は全体の12.1%を占めるが、そのうち畜産部門は農業収入全体の9.3%に当たる[NSO 2001]。この数字を見る限り、国家レベルでの経済・農業においては、畜産の重要性はそれほど高くないようにみえる。だがある農民が牛1頭を12000バーツで売却したとすると、そこで得られた収入は東北タイ農民の平均年収の12.7%、平均月収入の1.5ヶ月分に当たる。個別農家の家計レベルで農村経済の実態を検討するなら、家畜は見過ごしことのできない重大な要素だといえよう。

だがタイの家畜については人文・社会科学の分野でこれまであまり議論されてこなかった。本論文の対象地域である東北タイに限ってみると、特に1960年代半ば以降は農業と村落社会に関する大量の研究蓄積があるが、その多くは水田・稲作を中心とした記述に留まっている[cf. 石井(編)1975, 水野 1981 etc.]。これにはいくつかの理由が考えられる。第一に、これらの研究では稲作が村落経済の中心にあると想定されていた。この時代の研究には、日本の稲作とアジア各地の稲作との比較研究、また日本の「稲作文化」の起源論を視野に入れたものも多く見

受理日 2004. 5.18

所 属 福井県立大学学術教養センター

られた。ほぼ同じ時期に流行した稲作以前の基層文化の共通性を探るいわゆる「照葉樹林文化論」と平行する形で、アジア地域の「稲作文化」に過剰な関心がかけられていたと言えるだろう。第二に、東北タイの天水田を稲作の諸類型の一つとして論じる傾向があったことが挙げられる。タイ中部や北部にみられる灌漑システムを伴った稲作と社会組織をめぐっての研究蓄積が高まるとともに、東北部の自然・土壌に規定された天水田における稲作と社会の特異性を明らかにすることが大きな目的とされた。

こうした過去の研究のなかで家畜の存在は完全に無視されてきたわけではない。役畜または蓄財としての家畜についてはこれまでも少なからず言及されている。だがあくまでも「不安定な降雨と貧しい土壌」という東北タイの厳しい自然環境で行われる天水田稲作の分析が最前面に押し出され、家畜は周辺的にしか扱われてこなかった。筆者は東北タイの農業・経済において稲作がもつ重要性を否定するものではない。実際に農村での1年は米作りを中心に流れているし、穀霊の信仰、田植え前と収穫後の諸儀礼など米・稲作は宗教・信仰領域にまで深く関わっており、村落生活の諸局面で稲作が大きな意味を持っていることは明らかである。ただ稲作を中心に展開する既存の議論では農村の家畜をめぐる状況を適切に分析しているとはいえない。家畜という動物と人との直接的関わり、稲作とは異なった経済論理、独自の技術、食文化への影響など稲作を中心にした議論から抜け落ちてしまう部分はあまりに大きい。したがって、本論文はあえて家畜を議論の中心に据え、農民と家畜との関係を通して東北タイの農村生活を描き出す試みであり、現代タイの農村経済の分析に新たな視点を導入することを目指すものである。

2. タイの畜産における水牛と牛

タイで家畜として飼養されている動物には、象、馬、牛、水牛、豚、山羊、羊、鶏、アヒルなどがあるが、最もよく見られるのは牛、水牛、豚、鶏、アヒルである。これらを飼養形態でみると、(a)牛と水牛、(b)豚、(c)鶏とアヒルの3つに大きく分けられる。(a)草や稲藁などの粗飼料を中心に飼養され役畜としても用いられる牛と水牛、(b)米ぬかや濃厚飼料を用いて畜舎内のみで飼養される豚、(c)家屋の敷地内で放し飼いされる鶏とアヒルの3つであり、再生産の周期もそれぞれ異なっている。このうち本論文で主要な対象にするのは第一のグループで、牛と水牛を中心に議論を展開する。

タイでは現在約180万頭の水牛が飼育されており、これは東南アジア全域の水牛頭数の12.5%を占める¹⁾。この地域の水牛は沼沢水牛（スワンプ型）と呼ばれるもので、南アジア以西に多く見られる河川水牛（リバー型）に比べて乳量は非常に少ない。成牛の体重は雄が約400-600kg、雌が360-440kg程度になる。皮膚が黒く毛が少なく、熱吸収性が高いうえ、牛に比べると汗腺の数が1/6程度で、太陽光の下で活動すると急速に体温が上昇する。熱さに弱い

東北タイにおける家畜飼養の変容

で、体を冷やすため水や泥の中に身を浸すのを好む[NRC 1981:45]。地域別に見ると、現在東北部の水牛頭数は全国の82.6%を占めている。かつては中部地方でも水田での労役のために多くの水牛が飼養されていたが、1970年代以降農業の機械化が進むとともに急速に減少した。南アジアでは乳利用が行われるが、タイ農村ではほとんど見られず、労働と肉利用が飼養目的の中心であった。

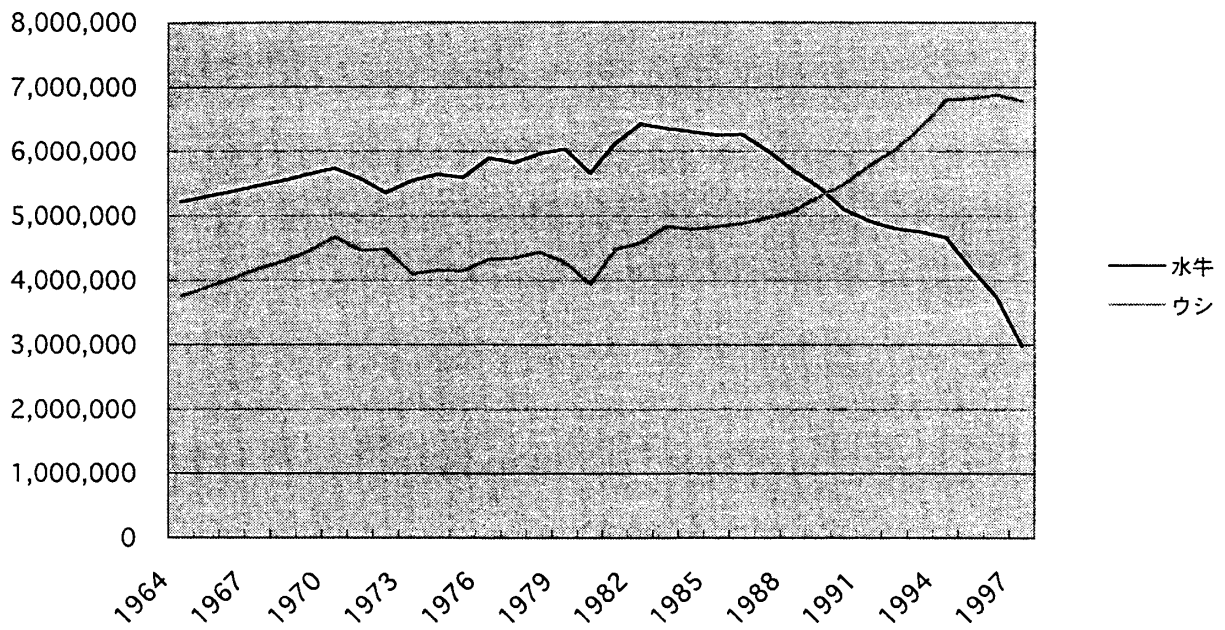
一方の牛は、元来地域の風土に適したネイティブ種（タイ・レック *thailek*）が主流であった²⁾。毛が短く、胴体は赤みがかった茶色だが、黒色、赤色、茶色、白色、クリーム色の個体も見られる。雄の背のこぶはよく発達しているが、雌のこぶは小さい。耳は小さく、胸垂と腹部下の皮膚もそれほど多くない。体は小さく成牛で雄は300-400kg、雌は200-250kgになるといわれる。妊娠可能年齢は2.71年、妊娠期間は270-275日、出産間隔は395日である[正木・大島: 745-746, KROMPASUSAT 2002:87]。主に牛車引きなどの労役と食肉に用いられた。1954年以降は外国種が導入され、肉牛としてはアメリカン・ブラーマン、インディアン・ゼブーなど、搾乳牛ではレッド・デーンズ、ブラウン・スイスなどの品種が持ち込まれ畜産局によって在来種との間で交雑が進められた。このうち肉牛ではアメリカン・ブラーマン（ブラーマン）、乳牛ではホルスタインが最もよく受容されている[PREEDA & PAITON 1983:91-92]。現在、東北タイの牛頭数は全国の49.8%を占めている。1970年代まで頭数に大きな変化は見られなかったが、1980年代以降増加に転じている。

両者を比較すると水牛の方がより厳しい環境に適応可能である。セルロースの消化能力が高いため乾燥した粗飼料での飼養に適しており、東北タイでは特に乾季の新鮮な青草が不足する時期でも体重を維持することが可能である。また蹄が大きく開いているため、足場の悪い水田では牛よりも楽に移動することができる。一方、人工授精技術に関しては水牛より牛の方が進んでいる。また妊娠も牛の方が若齢で可能であり、出産間隔も水牛の方が長い。また水路の整備などで灌漑が可能な地域では、一年中十分な量の新鮮な青草が得られるため肉・乳生産の効率性を考えると牛の方が適している[SASAKI 1994:12]。

牛と水牛はそれぞれ特性が違うがともに大型家畜獣として古くからタイの各地域で飼育されてきた。全国の飼育頭数をみると【図1 タイ全国の牛・水牛頭数、図2 東北タイの牛・水牛頭数】、水牛は1970年代以降減少し始め、牛は1980年代以降漸増している。その後1990年ごろを境に牛の頭数が水牛の頭数を凌駕した。全国の水牛の8割以上が集中している東北タイにおいても1997年ごろに牛の頭数が水牛の頭数を越えている。ここからうかがえるのは頭数のマクロな推移ではあるが、以下の章で東北タイ農村における家畜飼養のミクロな実態を分析することにより、牛と水牛のもつ経済・社会的意味の変遷を素描する。

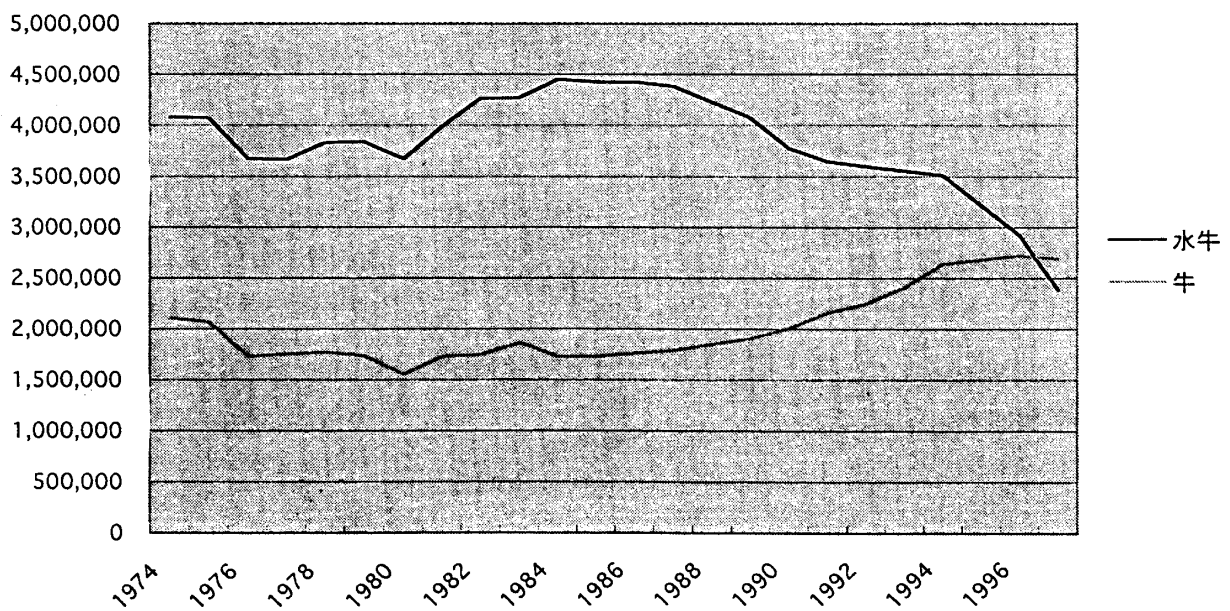
【図表】

図1 タイ全国の牛・水牛頭数



[Statistical Yearbook Thailand 1970~2000 より筆者作成]

図2 東北部の牛・水牛頭数



[Statistical Yearbook Thailand 1970~2000 より筆者作成]

3. 東北タイの天水田と牛・水牛

水牛や牛を研究するにあたって、その成長や繁殖など生物学的情報に注目する手法はこれまで畜産学や農学の分野で頻繁に行われてきた。だが水牛や牛は哺乳動物であると同時に「家畜」、つまり人間によって馴化された自然である。その意味では自然環境に強く規定されると同時に、生涯にわたって人間とともに有り続け、我々の社会と文化を構成する重要な要素となっている。こうした観点から、家畜についての人類学では、自然環境のみならず、歴史や地域性、物質文化など人間社会との関わりを含めた様々な要素を総合的に理解する視座が必要であると考えられる。本章では村落での家畜飼養の具体的な叙述に踏み込む前に、東北タイという地域性の文脈から水牛と牛と社会の有り様について概観する。

東北タイは国土全体の32.9%、人口では34.3%を占めるが、GNPでは全体の11.8%(1998年)、月別家計収入では全国平均の64.5%に過ぎない[NSO 2001]。こうした状況から東北部は「タイの貧困地域」として語られ、その要因として厳しい自然環境がしばしば挙げられる。

高谷[1985:72-74]によると、東北タイの自然環境はチー川とムン川の2つの河川を境界として3地域に分けられる。チー川沿いおよびチー川以北のラオ区と、チー川とムン川に挟まれたモン区、ムン川以南のクメール区である。ラオ区はメコン川左岸から移住してきたラオが多く、モチ米主体の稲作が行われるが、灌漑はほとんど見られない。モン区は一種の凹地帯で比較的水が得やすい低地である。水牛による犁耕と脱穀が見られ、用いられる稲はウルチ米が多い。クメール区は水が豊かでカンボジアと同様の稲作地帯としてウルチ米が多く栽培されている。このうち川沿いでない多くの地域で天水に依存した稲作が行われており、天水田という特殊な稲作様式が東北部の農業形態の代名詞となっている。

広くアジアのなかではインドのデカン高原、カンボジア平原、東北タイのコラート高原などが代表的な天水田地帯である。海岸からの距離が遠くモンスーンの影響を受けにくいため乾季に特に乾燥し、年間降雨量は800-1200mm程度になる。いずれの地域も平らな地形が広がり大きな集水域を持たないため安定した水の確保が常に問題となっている。

東北タイの開拓の様子をみると、最初に居住地の脇にあるノーン *nong* と呼ばれる小さな窪地を中心に水田を造成し、そこから同心円上に疎林を伐採して周囲の高位部に向け天水田を拓く。生産は不安定で、特に高位部の水田では雨量の豊富な年にしか植え付けが行われない[海田 1987:55-57, 1990:195]。高位部水田よりも高い土地は、キャッサバやサトウキビなどの畑作、あるいは家畜の放牧地として利用しており、開拓はほぼ限界まで進んでいる。

伝統的な稲作では、雨が降り始める6月頃に苗代の準備にかかり、7月から9月にかけて降雨で田地が満水すると田植えを行う。その際に水牛を使つての犁耕が行われた。また収穫は鎌を使つて高刈りし、乾かしたあと地面に叩きつけて脱穀を行い、牛車で家に持ち帰って米倉に貯蔵するのがかつては一般的であった[高谷 1985:72]。

このような東北タイに見られる天水田稲作について、コーンケーン県で調査をした福井[1987:304-305]は「田圃に落下する雨水のみに頼る純粹の天水依存ではない」と指摘している。福井によると、開拓が限界まで進んだ結果、ほとんどの水田は集水域を失った。だが現実をみると苗代には周囲のまだ植え付けられていない田圃の水が利用されるし、低位部の水田では盆地の底部に溜まった水が利用される。この低位部の水田には高位部の水田からの地下浸透水が流入しており、そのため天水畑作のような単純な天水依存ではなく「特殊な天水田」とであると、福井は結論づけている。

実際に筆者が調査を行っているコーンケーン県ムアン郡D地区N村³⁾においては、村に近い田圃の方が村から遠い田圃よりも「良い田圃 *naa dii*」とされ、土地の価格も村に近いほど高くなる。理由として、移動・運搬面での便利さは当然あるのだが、村からの田圃までの距離は土地の高度に比例しており、村に近い低位部の田圃は少量の雨でも湛水するが、村から遠い高位部ではかなりの雨が降らないと水田として利用できない。また村に近接した低位部水田では、生活排水が地下を浸透して田圃に水分を供給するという効果もある。一方で、村から遠くても「良い田圃」とされる土地があり、それはため池や小川が近くにある田圃地である。要するに表流水と地下水を含めた水の入手が容易な土地がN村では「良い田圃」の第一条件と考えられている。

土地の高低と水の入手可能性に規定された土地利用は家畜の飼養と密接に関わっていることはいうまでもない。特に雨期においては、降水の多寡に応じて高位部の田圃の利用可能性が大きく変化する。雨水が少ないあまり「天水田」としては利用不可能な高位部の一部の田圃地、“水田利用不可能地”は、牧草の不足しがちな雨期の放牧地として有効に活用されている。こうした状況を視野に入れるなら、「天水田稲作」を厳しい自然環境のなかで強いられたものとして東北タイの農業形態の特性と捉えるのは一面的であろう。天水・表流水・地下水を含めた全体的な水利用の結果として、稲作・畑作・家畜飼養の混合形態が、19世紀半ば以降急増したコラート高原の開拓以来これまで引き継がれてきた伝統的なこの地域の農業の特徴であるといえる。

4. N村における家畜飼養の現在

本章では筆者の調査村N村（コーンケーン県ムアン郡D地区）での収集データ（2003年8-9月）を中心に、東北部村落における牛と水牛を取り巻く状況を民族誌的に記述する。

4-1. 牛・水牛の食と住

東北タイ農村で広く見られる高床式家屋の下部の空間には簡単な厩舎が作られ、牛や水牛は夜に厩舎に引き入れられる。夜間に家畜を厩舎に連れ戻すのは盗難を避けるためで、家畜の盗

東北タイにおける家畜飼養の変容

難事件は農村部で頻繁に起きている。家屋の下で飼育すると牛糞を肥料として貯め置くことができ、さらに雨や太陽光による肥料の変質をも防ぐことが可能になる。また水牛は雨が降っても屋外で飼養するのに支障がないが、牛は雨に濡れると病気になりやすい⁴⁾。そのため激しい雨が降ると牛はなるべく厩舎に連れ戻し、別に刈り取っておいた下草を餌として与える。

高床下の空間で飼育するための飼育可能頭数には限界がある。N村の平均的な大きさの家屋では4頭ほどが限界であり、実際に3-4頭を飼育している世帯が最も多い。厩舎と餌台は村周辺の森で拾い集めた竹と木材を組み合わせで自分で製作するので、材料費などの出費はほとんどかからない。また多少頭数が増えても囲いを少し広げるだけで十分に対応が可能である。だがさらに飼育頭数を増やしたい場合には高床下の空間ではなく、敷地内の空いた土地に別棟で厩舎を建設することになる。最近では、伝統的な高床式家屋ではなく、床下の壁をコンクリートで固めた「現代的様式」の家屋が現在N村においても少なからず見られるようになった⁵⁾。こうした家屋では従来の床下空間は“壁で囲まれた1階の部屋”となり、外から見えない生活空間として利用される。そこでは家畜の飼養ができないため、敷地内の空いた土地に別途厩舎を建設しなければならない。こうした場合には建設費用として1-2万バーツの出費が新たに必要となる。その意味でも伝統的な高床式家屋の方が家畜飼養に関わる出費は抑えられる。

厩舎に残された牛糞は肥料として利用する。村内の精米機を持った世帯から無料で粃殻を譲り受け、牛糞と混ぜ合わせて肥料を作る。混ぜ合わせたのち厩舎脇に作った肥料小屋に運び入れて乾かしておく。牛糞だけで世帯の農業に必要な全ての肥料を賄えるわけではないが、化学肥料を購入する量は多少とも節約できるという。こうして作った肥料を田圃に撒き入れるのは田植え前の5-6月である。東北タイで化学肥料の利用が始まったのは1970年代である。1980年代半ば以降はいくつかの世帯で2輪トラクターが導入され、牛糞の肥料としての利用は多くの世帯で一時廃れた。だがここ数年、牛の飼育が村内で流行しているのを受け、牛糞の肥料としての利用も復活している。

牛や水牛は出産の前後や病気の時を除き、朝のうちに厩舎から草地に連れ出され、夕方までそこで採食して過ごす。以前は家畜を草地まで連れて行くのは子供の仕事であったが、現在ではほとんどが中年か老年の男女である。義務教育期間の延長や中等教育進学率の増加といった教育環境の変化、また若い世代で街での労働を好む傾向などが家庭内の労働分担に変化をもたらした契機と考えられる【写真1】。



写真1 採食に出るブラーマン牛と水牛

牛や水牛がこの地域で長く飼育されてきたのは、環境に適応して下草や農業の余剰生産物だけで飼養することが可能だからである⁶⁾。東北タイでは家畜の飼料は季節に応じて変化する。乾季の初め頃（12－2月ごろ）には、稲の切り株の残った田圃で放牧され、そこに自生する下草や藁などを採食させる。誰の土地であっても稲刈りが終わっていれば放牧するのは自由であり、空いた土地が家畜飼養に有効活用されている。乾季も終わりに近づくと（3－5月ごろ）、田圃での飼料が少なくなるので、稲刈り後に取っておいた稲藁を与える⁷⁾。この時期には枯れ草か稲藁しか採食できないために栄養不良が目立ち、成体の牛では乾季になると10-15%も体重を減少させるという[矢野 1986:12-13, PREEDA & PAITON 1983:93-96]。

一方、雨季になると多くの田圃や畑地で耕作が行われるので、逆に放牧可能な土地は減少する。そのため道路沿いの草地や学校のグラウンド、田圃の畦、ため池のほとり、水路の脇、あるいは高位部の森や共有牧草地など、ありとあらゆる隙間の土地を用いて採食が行われる。田圃の近くにいる場合、稲を食べさせないように注意する必要があるため、10メートル前後の紐を灌木などに結び付け、一定の場所から動かないように繋牧するのが通例である。またこの時期には家畜に補充的に与えるための青草刈りに追われる。日中の空いた時間に村近くの休閑地や池の畔で鎌を片手に草を刈り取り、台車に乗せて家に持ち帰る。雨季は、多くの土地で稲作が行われており、家畜が採食可能な土地が減少するため、青草を刈り取って与える作業は重要な毎日の日課となる。

雨季の期間に有効に利用されるのが、ため池のほとりと高位部の“水田利用不可能地”である。ため池は東北タイ村落にしばしば見られるが、そこから水路を引いて灌漑用水として積極的に利用している様子はあまりうかがえない。実際に第二次大戦後、タイの灌漑局によって東北タイに多くのため池が作られたが、池敷としての潰れ地面積が大きいという、肥沃な谷底地が池敷として取られるため、多くの場合経済的メリットはなかったという[海田 1987:88-89]。そもそも東北タイのため池は灌漑用のために掘られたものではなく、牧草地、養魚地としての利用が第一目的であったともいわれている[矢野 1986:13]。

一方、牧草地として活用されることが多かったのは村の外縁部に位置する未耕地であった。だがこの種の未耕地は1960年代以降商品作物の栽培が活発化するにつれ畑地として利用されて徐々に減少していった。また土地の開拓が限界まで進んだ現在、相続分配により世帯当たりの耕地面積は小規模化するばかりで、耕作地全体に占める未耕地の割合も減っている。さらに都市近郊農村では、村はずれの比較的広い未耕地は売却されて新興住宅地として開発されているところも多い[RWANGSAK 2001:43]。だが、前章で見たとおり、東北タイでは特に高位部の田圃地において、ある一定部分の土地が降水不足のため天水田としての利用ができない“水田利用不可能地”が存在する。この一次的で偶発的な未耕地である“水田利用不可能地”が牛・水牛の牧草地として活用され、現在の東北タイの家畜飼養を支えている。とはいえ、牛や水牛

東北タイにおける家畜飼養の変容

の餌場の不足は着実に進行しており、大規模な群れでの飼育は徐々に困難になりつつある。

4-2. 牛・水牛の労役

元来は役畜として利用されていた牛・水牛だが、現在では役畜としての利用はほとんどみられない。実際にN村では、水牛を労働に使っているのはわずか1世帯のみで、牛を役畜として使用している世帯は皆無である。

かつてはクヴィアン *kwian* と呼ばれる牛車を引くため、また犁耕のために牛や水牛が用いられた⁸⁾。まず移動・運搬の手段としてのクヴィアンであるが、東北部では主に牛が挽獣として用いられた⁹⁾。牛なら250kgまで、水牛なら400kgまでの荷物を引くことができた[PREEDA & PAITON 1983:71]。東北部は砂地で平坦な土地が多いうえ、荷物の運搬より移動手段として利用する傾向が強く、大



写真2 装飾物となったクヴィアン

きな力を必要としなかったため牛が用いられたのであろう。主に田圃と家屋の間での移動・運搬に利用されたが、村と村あるいは村から町への移動にもクヴィアンは用いられた。だが1970年代半ばよりトラクターやピックアップトラックによる移動・運搬が始まるようになった。現在のN村でクヴィアンは実用的には用いられておらず、村内に残っている2台ほどのクヴィアンはンガン・ブンバンファイ *ngan bunbanfai* などの年中行事の際の行列で見られる程度である。クヴィアンの台車には細かい彫刻・文様があり民俗芸術品として評価されている[A MORAPHON 1992:68]。N村内のクヴィアンの多くも街から来た人が買ってしまい今はほとんど残っていない。こうしたクヴィアンは東北タイのノスタルジックな過去の象徴として現在は街のレストランなどで装飾的として飾られている【写真2】。



写真3 水牛による犁耕

一方の家畜を使った犁耕であるが、東北タイでは牛ではなく水牛を用いて行われた。1980年代の調査によると、水牛は年間60-120日間ほど耕作に用いられ、役畜としては12才まで働くことができた[CHARAN 1983:858]。この地域は個々の田圃の耕地面積が小さく、家族内労働力に余裕があるので、水牛を耕作に用いることは経済的にも適していた【写真3】。

水牛を使って1ライ(1600平方メートル)の土

地を耕起するのにかかる時間は16－21時間ほどで、水牛の労働可能時間は1日当たり5時間ほどであった。水牛は1頭当たり年間10.6ライの土地を耕すことが可能で、6－8月が水牛にとっての繁忙期であった[OOA 1979:22, PRASOB 1963:29]。水牛で耕作することの利点としては、肥料が得られること、トラクターを使用する際の燃料費・修繕費・賃貸料が節約できること、また家畜飼養のため田植え前でも頻繁に田圃に出向くので田植えに適切な土壌と水の状態を日常的に把握できること、さらに畦の補修など田圃の保全を十分に行えることがあった[IAM 1999:54-58]。また東北部では小規模な田圃を分散して所有する傾向があるため、トラクターを各所に運搬して利用するよりは水牛を用いる方が手軽である。

こうした利点がありながらも、現在は東北部の多くの地域で二輪トラクターによる耕作が行われている¹⁰⁾。N村では1990年代半ばごろから2輪トラクターを持つ世帯が増え始め、現在約8割の世帯が所有している。トラクターのない世帯では1ライ当たり150－250バーツの賃借料を支払って耕作する。トラクターは費用が高く、水牛のもついくつかのメリットが得られないにも関わらず、世帯内労働力の不足のため労働の効率性を重視してトラクターに乗り換える農民が増えている。また労働効率性のみならず、トラクターを所有することで得られる社会的ステータスも大きく価値づけられている。「一昔前は水牛をたくさん持っているのはお金持ちだったが、いまでは水牛で耕している人は貧乏な家だよ」とN村の農民は語っている。

4－3．食肉としての利用

牛でも水牛でも労働力として使えなくなると食肉として利用される。だが水牛に関しては老いても死ぬまで飼いつけている世帯が現在のN村でも見られる。遺産として親から引き継いだり、小さい頃から一緒に田仕事をしてともに年を重ねてきたため、「水牛は家族と同じような存在」という感覚を持っている。かつてのN村では水牛が死ぬと僧侶を招請して葬儀を行い、家屋の近くに埋葬をした。また別の村では、水牛が死ぬと飼い主が解体し、親戚や知人を集めて分配・共食が行われたという報告もある。共食することで死んだ水牛に対して功德を積むこと(*thambun*)になるとになると考えられた[SUWIT 1996:34]。

水牛に格別の敬意が払われていたことは水牛のタムクワン儀礼(*phithikhwankhwai*)がN村でかつて行われていたことからもうかがえる。水牛に感謝を示すと同時に、過酷な労働への許しを乞うための儀礼で、毎年稲刈り後に行われた。モースークワン(*mosukhwan*)と呼ばれる宗教職能者が呼ばれ、盆の上に、バナナの葉で作った装飾物(*kruaidokmai*)、聖糸、青草、ゆでた鶏1羽、酒1瓶、モチ米で作った菓子(*khautommat*)、聖水、線香と蠟燭などの供物を盛りつける。モースークワンが呪文を唱えながら供物を小さくまとめて包み、聖糸で水牛の角に結びつける。その後、聖水を水牛に振りかけて健康を祈願したのち、飼い主が水牛に青草を一掴み与えて水牛に許しを乞うという[SUWIT 1996:34]。この種の葬儀やタムクワン儀礼は牛に

東北タイにおける家畜飼養の変容

対しては行われず、水牛だけがその対象となっていた。

過去において、タイの食生活ではタンパク質の多くを魚介類に依存していたが、機会に応じて豚や牛、水牛などを屠殺して共食し、特別な食事として肉食が位置づけられてきた。東北タイの伝統的な料理としてはラープ *lap* やコーイ *koi* などの肉料理が有名だが、それらは基本的には牛や水牛を使ったものである。いまでも結婚式などで牛や豚を屠殺して参加者に振る舞われており、やはり特別な食事であることには変わりはない。だが近年肉食はより日常的になっており、都市部のみならず農村部においても鶏肉・豚肉・牛肉の需要は高まっている¹¹⁾。

一般的に肉食は普及しているが、ときに牛肉や水牛肉に対する忌避をタイでは目にすることがある。華僑系にみられる観音信仰 (*caumaekwanim*) の信者はしばしば牛肉を食べないし、宗教的な理由ではなく「大きな獣は殺されるのが可哀想だから」牛肉を食さない場合もしばしばある。この牛肉食の忌避はとりわけ都市生活者に多く見られる。

水牛肉について、N村では「出産明けの女性はクラブンに反するから (*phit krabun*) 水牛は食べない」という。クラブン (またはサムデー *samdaeng*) というのは特に出産明けの女性の間で守られている食慣行であり、男性は禁忌の内容を詳しく知らない者も多い。具体的に禁忌の対象になっているのは、ネズミ、田圃の魚、森の鳥獣、水牛などで、豚や牛は禁忌の対象ではない。クラブンに反したものを食べると、出産後の傷の治りが遅れたり、腹痛、頭痛、足の痛みなどの症状を示すという¹²⁾。

現在のN村では水牛肉はほとんど食されないが¹³⁾、豚肉や牛肉は日常的に消費されている。N村には現在、屠畜と食肉販売を村内で行う村人が1名いる。彼は月に数度豚や牛を屠殺し、肉を切り分けて村人に販売し、「肉屋」のような役割を果たしている¹⁴⁾。豚は村内で買い付けることもあるが、牛については彼に売る村人はいないため村外から購入する。彼から肉を買う村人、つまり顧客となるのは彼と契約をしている村内の世帯で、豚肉・牛肉ともに20世帯ずつほどが定期的に購入している。それぞれ世帯人数に応じて1回当たり50-200バーツの割り当て量を、彼との間であらかじめ取り決めておき、彼が豚や牛を屠殺すると、肉を切り分けて割り当て分を村人の家屋まで配達する。届けてから5-7日ほど経つと集金に各戸を回り、予め決めておいた料金を回収する。こうした食肉販売のシステムが村内で確立していることから、従来に比べて肉食がかなり常態化したと見ることができる。

水牛については現在でも特に女性の間に食禁忌を残しているが、豚肉と牛肉については食卓に上がる頻度が近年増えている。農村部で飼養される家畜が1980年代半ば以降水牛から牛へと重点が移行しているが、飼養家畜の変化は農村部の食卓にも影響を及ぼしていると思われる。だが、それでもなお「すぐに殺されることがわかっているのに彼に売ることなどできない」と村の肉屋に牛を売らない理由をある村人が語っている。肉牛の飼養は増えながらも、単純に食肉生産のための肉牛飼養であると割り切ることでない複雑な農民の思惑が垣間見える。

5. 牛・水牛の売買

5-1. 交配と「獣医」

以前のN村では家畜の交配を人為的に管理することはなく、特に乾季の放牧時には自然に繁殖を行わせていた。水牛でも牛でも新たに生まれる子牛は雌の方が好まれる。雌であれば成長するまで育て、子牛を生ませて頭数の増加を狙う。雄ならば、かつては体の大きい立派な個体は去勢をして役畜として売却されることが多かった。肉付きの良い大きな雄牛ほど役畜として有能であるし、肉牛としても重宝されて価格も上昇する。以前は雄牛への去勢は普通3.0-3.5才ぐらいのときに、村内の技術を持つ人によって行われた。だが現在N村ではそうした技術を持つのは老人ばかりなので¹⁵⁾、去勢の際は村内で「獣医(mosat)」と呼ばれている人に頼る。去勢は元来性格の荒い雄を和らげ、労役のときなど扱いやすくするためのものであった。だが現在は牛や水牛を役畜として用いることはほとんどない。そのため雄が生まれても去勢の必要が生じる前に食肉として村外に売却してしまう場合が多い。

N村で現在家畜について詳しいとされるのは、村人に「獣医」と呼ばれている40代の男性である。彼が「獣医」と呼ばれるようになったのは今から10年ほど前のことで、ちょうど飼養する家畜の水牛から牛へと移った時期に当たる。「獣医」と呼ばれるものの、獣医学を体系的に学んだわけではなく、郡役所で簡単な研修を受けたあと、家畜の病気治療や交配などを村内で専門的に行うようになったというものである。以前のN村には「獣医」がおらず、家畜が病気になったときは街の獣医を頼らねばならなかった。ただ以前は伝統的な病への対処法も村人によって実践されていた。たとえば田蟹とタマリンドをつぶして混ぜ合わせたものを水に溶かして牧草に混ぜ牛に与えると寄生虫を除去する効果があった。だが現在は「獣医」を頼ることが多いため、伝統的な方法はあまり用いられることがない。「獣医」の役割には、病の治療や予防接種のほか、牛や水牛への種付けがある。牛と水牛の種牛をそれぞれ2頭ほど飼育しており、種付けは1頭当たり500パーツで請け負う。もし受精しなかったら成功するまで何度でも無料で行う。およそ20日で受精したかどうかの見極めが行われる。妊娠期間は牛で約9ヶ月、水牛は約10ヶ月である。

5-2. 家畜市場

家畜を新たに飼い始めるには大きく分けて2つの方法がある。村の中で借り受ける場合と、家畜市場などで購入する場合である。まずは借り受けについてN村の場合をみると、たとえば村内で雑貨店を営んでいるある世帯は牛を10頭以上所有している。自分の家族だけでは面倒をみられないので、親戚や知人に飼育を依頼する。牛を借り受けた方(飼養者)は本来の所有者に対して借受金などの対価を支払う必要はなく、ただ日常の飼養全般について面倒をみるのが求められる。成育した牛ならば1年ほどで子牛が生まれるが、最初に生まれた子牛は所有

東北タイにおける家畜飼養の変容

者のものになり、2頭目は飼養者がもらい受ける。さらに3頭目の子牛は所有者、4頭目は飼養者のものと順番に入れ替わる。飼養者の子牛であっても、牛ではなくて現金が必要な場合には元の親牛の所有者が適正な価格で買い上げる。交配については所有者の側が費用を負担する場合が多いが、一方病気の治療では場合に応じて、所有者・飼養者各自が負担する。こうした貸し付け形式での飼養は村内では一般的で、子牛の配分方法も村内ではほぼ共通している。

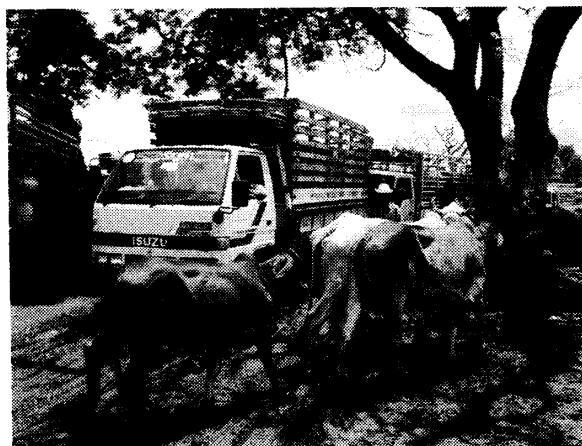


写真4 家畜市場の様子

次に購入する場合についてみると、N村からコーンケー市に向かって10kmほどの国道沿いに家畜の定期市がある。村人の多くはその市場で牛を購入する【写真4】。市場が開かれるのは毎週火曜日で、家畜市場には前日の夕方から牛や水牛が搬入される。当日には街道沿いに大量のトラックが列をなし、牛や水牛を買い手の村に運ぶのを待ち構えている。東西300メートルほどに広がる市場の敷地の東端には水牛、中央部と西側の敷地には牛がほぼ品種ごとに集

まって取引されている。売り手は自分が連れてきた牛の横に立ち、興味を示してきた人に値段を示し買い手との間で価格交渉を行う。10頭以上を集めて売っている大規模な家畜販売業者もいるが、必要に迫られて2-3頭の牛を売りに出している農民の姿も見られる。市場に買いに来た人は、興味のある牛がいると売り手に値段を尋ね、それ以外にも通りすがりの人—市場で牛を買ってこれから村に連れて帰る人—にも手当たり次第値段を聞いて回る。見知らぬ人同士で会話を交わしあい、その時その市場での「相場」に関する情報を交換して、適正価格の見通しを得る。2003年8月の筆者の調査時の取引価格は、水牛なら1万バーツから3万バーツ、牛は種類によるがヒンドゥー・ブラシン種で2万バーツから10万バーツ、アメリカン・ブラーマン種で2万バーツから4万バーツ、タイ・レック種では6千から1万5千バーツ程度であった¹⁶⁾。値段は家畜の体重に応じて決まるのではなく、体重は取引の場面で測ることすらしない。売り手は以前の取引と自分の経済的必要性に応じて価格を設定し、それに対して買い手の側は料金交渉を行う。買い手の方も市場内でのやりとりの中で適正価格についての大方の情報を得ているので、大抵は適正な価格で両者の合意が得られ取引が成立する。上で見たとおり、価格は普通の農民にとって決して安いものではない。購入資金には、キャッサバやサトウキビなどの商品作物の栽培で得た資金を用いる場合が多いが、これは広い畑地で大規模に商品作物栽培を行っている農民に限られる。ほかには結婚式・葬式などの際に祝儀・不祝儀で集まった現金を家畜の購入資金に回す世帯も見られる。最初は雌牛を1頭だけ購入し、その後交配を繰り返して少しずつ増やしていくというのがN村での通常の家畜飼養である。

5-3. 牛・水牛の売却

こうして入手して殖やした家畜は現在では必要に応じて売却される。水牛については老いても死ぬまで飼いつけるという人が多いが、牛をめぐる取引は現在のN村で活発に行われている。とはいえ、牛を売って手放すのは必要に迫られた場合が多い。たとえば結婚式や得度式などライフサイクルの様々な局面で大きな現金が必要となったときに、貯蓄財としての家畜を売却する。生まれた仔牛が雌牛の時には、外来種では12ヶ月で初妊娠が可能になるため、手放さずに成育して頭数を増やし、さらに生産性を高めようとする。一方、生まれたのが雄牛の時には、成長すると性格が荒くなり飼育に手間がかかるため、雄仔牛と母牛の2頭を1組にして売りに出し、得た資金で別の若い雌牛を購入する場合が多い。

N村では牛を売却するには2通りの経路がある。先に述べた家畜市場での取引と村内での取引である。家畜市場での取引は前節で述べた通りであるが、一方、村内での取引というのは先述の「獣医」を媒介にした取引形態である。村人が「獣医」に家畜を売りたい旨を告げると、「獣医」は村外の間業者に連絡を取って、間業者が買い受けのために村にやってくる。間業者はかつて「ナーイホーイ *naihoi*」と呼ばれた人々で¹⁷⁾、現在ポーカーウア *phokhawua* (牛の商人)、ポーカークワイ *phokhakhwai* (水牛の商人) などと呼ばれる。彼らは買い集めた牛を一時的に飼育し、再び農民に売ったり、市場や屠畜場にまとめて売却したりする。1970年代の調査では1回の転売で間業者が得られる利益は100-200バーツ程度であったが[水野1981:54-55、PREEDA&PAITON 1983:122-124]、現在では1回の取引で500バーツ以上の利益を得ている間業者も見られる。

間業者を相手に村内で行う場合の取引価格は、家畜市場での取引価格と少し異なる。もちろん村人も家畜市場での「相場」に関する情報は持っているし、村内で新しく牛を買った人を見かけると値段を尋ねるので、村にいても常に「相場」情報はアップデートされている。だが、村外から買い付けに来た間業者は村人の提示する「相場」価格を強気に値切ることが多い。村人が家畜を売るときは現金が緊急に必要なことが多く、大抵の場合は売り手の村人が折れて値段を下げてしまう。また逆に村内外の知人・親戚に売る場合にも、お互いに見知っているため強気な価格交渉ができず安く売り払うことが多い。「どうせ売るのなら同じ村の友人・親戚よりも、遠くの村の知らない人の方が気が楽だ」とN村の人は語っている。村内での取引は、村外の家畜市場での取引価格と大枠では連動して推移しながらも、最終的には多くの場合買い手に有利な方向で行われるのである。

5-4. 貯蓄から「美しさ」への投資へ

これまで東北タイ農村における家畜の一日および家畜の一生とそれに関連する様々な事象を検討するなかで、東北部農村における家畜と人との関わりの変容、つまり社会のなかでの家畜

東北タイにおける家畜飼養の変容

の意味づけの変容が近年起こりつつある様子がうかがえた。終章ではその社会的意味の変容についてさらに掘り下げて考察する。

まず現在の東北タイN村の家畜頭数は次のようになっている【表1】。

表1 N村における家畜飼育

	飼育世帯数	総飼育頭数	世帯当たり最頻飼育頭数
牛	40	215	3 - 4
水牛	3	25	8 - 10

(N村の総世帯数は141世帯、人口は785人)

牛を飼っている世帯はおよそ40世帯で215頭。1世帯当たり3-4頭が最も多い。水牛を飼っているのは3世帯で25頭、各世帯は8-10頭を飼育している。水牛頭数はかなり減少しているが、牛は過去3年ほどで急増している。東北タイで現在飼養されている牛は大きく3品種ある。価格の安いものから挙げるなら、タイ・レックと呼ばれるネイティブ種が最も安く【写真5】、一頭あたり6000~2万バーツほどである。体色は茶色で、体軀は他の二種に比べると小さいため食肉の生産性は低い。風土病に強く耐暑性があるため、海外から導入された新品種と交配させるのに用いられる。次に高価なのはアメリカン・ブラーマン（ブラーマン）と呼ばれる品種で、1万バーツから5万バーツほどで売買されている。現在N村周辺で最も多く見かけるタイプで、食肉生産のためにアメリカ・テキサス州から1950年代にタイに導入された。白色のものが多く、灰色や黒ずんだ色のものもある。角は短く横に伸び、耳は大きく垂れ下がっており、こぶと胸垂は大きく皮膚は全体的に弛緩している。成牛の体重は雄で730-1000kg、雌は450-680kgになる[正木・大島 1973:747]。最も高価なヒンドゥー・ブラシンと呼ばれる品種は1万バーツから高いものでは20万バーツのものもある【写真6】。白色・灰色が多く、ブラーマン種に似ているが、顔はより細長く、耳や胸垂はさらに長く大きく垂れ下がっており、体つきも一回り大きいものが多い。

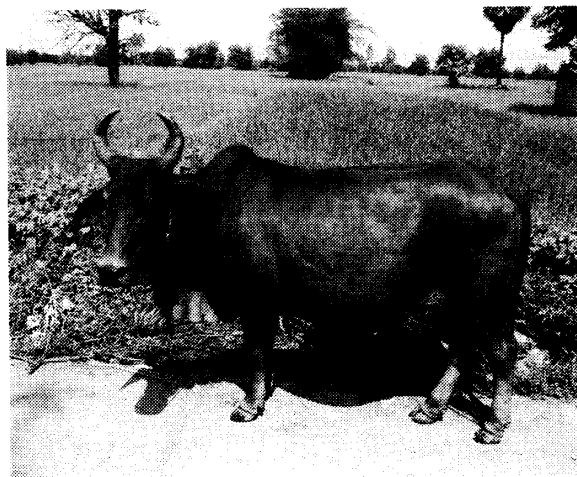


写真5 タイ・レック種



写真6 ヒンドゥー・ブラシン種

水牛やネイティブ種、ブラーマン種の牛の価格は、すでに述べたとおり体の大きさや肉付きではほぼ値段が決まる。それに対してヒンドゥー・ブラシンの価格の設定は他種と異なり、「美しさ *khwamngam*」によって値段が変化するという。「美しさ」とは、顔立ち、乳、耳と胸垂、毛並み、脚部などで総合的に判断され、「美しい」ほど価格も高くなる。体高や体重で価格が決定するというよりは、個人が判断した「美しさ」への満足度として価格が決定されるので、場合によって価格はかなり引き上げられる。食肉として生産するなら外見の「美しさ」という要素はそれほど重要ではなく、「美しさ」に応じて価格が上下するというのは理解しがたい。だが村人は「ヒンドゥー・ブラシンは肉のために売買するのではない」と語る。「育てるための動物 (*sat thicaliang*)」であると説明する¹⁸⁾。最終的には食肉生産のために取引されるというのは紛れもない事実なのだが、どうやらヒンドゥー・ブラシン種の多くは繁殖牛として村人に飼育されているようである。雌牛なら飼育して子供を産ませることで、当初の資本を他の品種に比べて割高に増加させることができるし、雄牛であれば種牛として育て他のブラーマン種と交配させることで交配料を得ることができる。一般的にブラーマン種はヒンドゥー・ブラシン種と交配させると、生まれる子牛の価値は元のブラーマン種より高まるという。そこには純粋なブラーマン種もヒンドゥー・ブラシン種も存在せず、両者は連続的につながっているかのようである。実際、ブラーマン種もヒンドゥー・ブラシン種ともにネイティブ種や別の品種の牛との配合によって作り出された雑種である。村人の感覚においても両者は連続的に捉えられているのであるが、ヒンドゥー・ブラシン種の血統には付加価値が備わっている点に相違がある。つまり、ヒンドゥー・ブラシン種は、ブラーマン種と同じく牛という家畜であると同時に「ヒンドゥー・ブラシン」の血統という価値を持つ。ヒンドゥー・ブラシン種の所有者は、単に肉牛として売却可能な牛を飼っているだけではなく、「ヒンドゥー・ブラシン」性という家畜飼養のなかで新たに生成した象徴的価値をも含めて所有し、その利益を享受することができるのである。ヒンドゥー・ブラシンについて語られる「美しさ」なるものは、東北タイの家畜飼養における新たな潮流の一端を示している。

6. おわりに

本来、牛や水牛の飼養には多様な有効性があつたために東北タイの農村で家畜として利用されてきた。伝統的な家畜飼養の利点といえば、(1)農業労働力としての利用、(2)生産性の低い農地の活用、(3)家族内余剰労働力の有効活用、(4)低リスクの財産貯蓄、(5)飢饉・不作に対応するための保険的役割などがあげられる。だが現在ではトラクターの導入により役畜としての利用は衰微したし、中等教育への進学率の増加や村外就労機会の増大に伴って村内での家族労働力は減少するばかりである。役畜として利用されることの多かった水牛は、より食肉利用が盛んで取引価格の高い牛に取って代わられており、また多様な品種が導入されるなか「美しさ」と

東北タイにおける家畜飼養の変容

いう新たな価値付けが生成し、そこに価格の急騰がみられる。従来のように必要性が生じた場合の「長期貯蓄財」としての利用はもちろん現在でもあるが、一部ではこうした家畜を「投資財」としてさらなる資本の蓄積を狙う動きを見ることができる。たとえば、N村では牛の飼育で一財をなし、現在30頭ものヒンドゥー・ブラシンを飼育する人、また得たお金で乗り合いバスを購入しコーンケン市と村を結ぶ新規バス路線を開設した人もいる。こうした人々は家畜飼養に対する初期投資も大きい。大型トラックを購入し、多くの牛をそれで運搬し、村から遠く離れた専用の牧草地で飼育する。多くを投資し、また多くの見返りを期待する。1970年代以降東北タイで盛んになった商品作物栽培に見られたような経済論理が家畜飼養にも現れ始めている。

だが多くの農民はこうした一部の成功例に憧れながらも、伝統的に行われてきた家畜飼養を小規模に行う。厩舎にも飼料にも資金をかけず、自然環境に適した土地利用法を採り、ただ水牛が牛に変わっただけで従来と大差のない家畜飼養を行っている。とはいえ家畜飼養をとりまく経済・社会状況は大きく変質している。伝統的な村落経済のなかでは、牛・水牛など家畜という高価な財は、安易に売ったり交換できるような「商品」ではなく、[cf. 嶋田 1995:248-249]、特別な機会の共食での食肉利用を除けば手元に残り続ける資本であった。だが1980年代半ば以降、東北タイ農村においても、二輪トラクターの導入など農業の機械化が進行し、貨幣経済がより大規模に農村経済に入り込んできた。そうしたなか、元来、大きな貨幣価値を持ち得た家畜は、ある場合にトラクターや精米機などへと姿を変えうる交換財、商品へと変質していった。現在N村で見られるヒンドゥー・ブラシンのもつ投機的性格は、貨幣経済化というフィルターを通した家畜のもつ経済価値の転位を如実に反映したものと見ることができるだろう。もともと稲作のリスクを軽減させる保険としての家畜飼養ではあったが、貨幣経済化に代表されるマクロな社会変化の波間で、東北タイの家畜飼養のもつ経済性はいくぶん投機的な傾向を帯び始めている。

N村における牛飼養の高まりはここ3年ほどの傾向であり、ここで述べたような投機的傾向が一時的なものかどうかは、今後とも継続して観察する必要がある。しかし、タイ国では牛や鶏などの家畜飼養の専門雑誌が近年多数出版されており、家畜飼養への関心の高まりは本文で論じたN村に留まらず、おそらく全国的な傾向とみることができる。今後は東北タイにおける家畜飼養とその取引きをめぐる詳細かつ具体的なデータの蓄積ともに、タイ国内の他地域での家畜飼養の比較検討も求められるであろう。

注

- 1) データ出所：FAOウェブページより[<http://www.fao.org>]。
- 2) ネイティブ種の起源については、インドや北マレーシア、中国南部など諸説があるが結論は出ていない。
- 3) N村はコーンケン市より西に20kmほど離れたところに位置する。世帯数は141世帯で、人口は785人（男性450人、女性335人）。筆者は2003年8月より9月にかけてN村を中心にフィールド調査を行った。
- 4) 逆に晴れた日に照り付ける太陽光の下にずっと出ているのも健康を害するため、田圃の中に残っている木陰などで牛や水牛を休ませている風景はよく見られる。
- 5) コンクリートで床下部分を覆った家屋は、完全な新築のほか、従来の家屋をリフォームする過程でも作られる。近年ではN村周辺の林地で木材を調達するのが難しくなっており、材木の価格も上がっているため、費用を抑える目的からもコンクリートの家屋を志向する傾向がある。
- 6) ただし近年開発の進んでいる搾乳牛に関しては、下草だけの粗飼料ではなく、米ぬか、キャッサバ、大豆かすなどを混合した輸入物の濃厚飼料を与えている場合が多い。
- 7) ラオスや東北タイの一部では、乾季が進み飼料が不足すると、周囲の森林に放牧して雨季が始まるまで所有者のもとに戻らず森林の中に放しておくような飼養管理法を取っている[川島 1997:244]。
- 8) 運搬・移動、犁耕以外の労働として水牛に轡を踏ませて脱穀を行っている地域もあったが、東北部のN村では水牛を使つての脱穀は行われなかった。
- 9) 一方水牛のクヴィアンはチャオプラヤー川流域でよく見られ、牛のクヴィアンに比べて大きく泥地に適している。ただ牛に比べて移動速度が遅いのが難点である[BUN 1999:37]。
- 10) 全国的には、二輪トラクターの導入は主に二期作を行う灌漑地域に早くから見られた。トラクターの労働能率が水牛に較べて優れているうえ、二期作をする場合には耕起に費やせる時間が非常に限られていることが理由として挙げられている[PREEDA & PAITON 1983:73]。
- 11) 柿崎[1988:67-68]によると、タイにおいて豚肉食が広まったのは中国人による豚の屠殺・販売ルートの確立が関係しており、中国人が地方に流入するとともに地方にも豚肉食が広まっていったという。
- 12) 逆に出産後の女性が食べると好ましいとされているのが、タマリンドのスープ (*kaeng makham*) や塩などで、出産明けのユーファイ（火に当たることで出産後の回復を図るという民俗医療的慣習）の間はこうした食物を取るよう勧められる。
- 13) 水牛の肉はまずいという一般に考えられているが、肉用に育てられた水牛の肉は牛の肉よりも味がよいという調査結果も見られる[NRC 1981:10]。だがタイでは多くの水牛は食肉生産のために飼養されており、労働力としての有用性がなくなったために屠殺されたものであり、結果的に水牛の肉質は悪くなっている。現在ではルークチンなどの加工肉としてタイでも市場に出回っているし、現在のように水牛頭数が減少する以前は食肉としてシンガポールなどの国外に輸出されていた。
- 14) 家畜市場と屠畜場を通った正規のルートでは、課税や検査、屠畜年齢の制限などがあるため、こうした密殺はしばしばタイで行われている[SWARTZ&BROOKS 1992:3]。
- 15) 小型獣の豚の場合は、去勢は普通の村人の手によって行われている。牛や水牛などの大型獣と小型獣では方法が異なり、大型獣については専門家の知識と技術が必要であると村人は語る。
- 16) 家畜の価格は季節によっても推移する。雨季になると採草草が減少するため下草刈りなどの労働が増える。労働を苦にして売りに出すものも多く、雨季には値段も下がる。だが乾季になって放牧可能な土地が拡大すると飼養が容易になるため、価格は上昇し、季節に応じて値段が上下している。
- 17) ナーイホーイ *naihoi* と呼ばれる交易者はかつて東北タイの村から家畜を買い付け、15人から120人ぐらゐが集団となり牛や水牛を歩かせながら中部地方まで運んでいった。1855年のボーリング条約以降中部での水田開発が進行したため、水田耕作を支える役畜の需要が増加したことが背景にある。ナーイホーイは牛

東北タイにおける家畜飼養の変容

や水牛のほか唐辛子、塩、焼き物、刃物、衣料などを扱い、中部と東北部の交易を支える重要な役割を担った。だが1970年代以降中部地方の農村にトラクターが導入されて以降、中部地方で水牛の必要性が薄れナニーホーイもその存在意義を失った[DECHA 1993:167]。

- 18) 多くの農民は最初期には資金の限界からブラーマン種を購入・飼育するも、そこで資金が貯まるとヒンドゥー・ブラシン種を飼育したいと考えている。

参考文献

- AMORAPHON Sansaendi 1992 "Konglohaengphumipanyathaipaisinsutthi phiphithaphankwian", *Sayamaraya*, vol.1 no.3, p.61-72 (タイ語).
- BUN 1999 "Kwianwuahetchanaitongkwiankhwai", *Sinlapawathanatham*, vol.20 no.9, pp.36-37 (タイ語).
- CHARAN Chantalakhana 1981 "Researches on the Water Buffaloes in Thailand during the Last Decade", in Maneewan Kamonpatana (ed.), *Proceedings of the Second Coordination Meeting of Regional Cooperative Agreement on the Use of Nuclear Techniques to Improve Domestic Buffalo Production in Asia*, pp.211-217, Bangkok:Chulalongkorn University Press.
- CHARAN Chantalakhana 1983 「タイ国を中心とした東南アジアの畜産 (1)」『畜産の研究』vol.37 no.7, pp.854-860.
- DECHA Siriphat 1993 "Khwaikapchaunathai", *Pacarayasan*, vol.20 no.1, pp.158-171 (タイ語).
- 福井捷郎 1987 「エコロジーと技術」渡部忠世ほか『アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー—』, pp.277-331, 東京: 小学館.
- IAM Thongdi 1999 "Khwaikapkanphwngtonengkongchaunathai", *Phasalaewathanatham*, vol.18 no.2, pp.51-60.
- 石井米雄 (編) 1975 『タイ国 ひとつの稲作社会』, 東京: 創文社.
- 海田能宏 1987 「<水文>と<水利>の生態」渡部忠世ほか『アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー—』, pp.75-108, 東京: 小学館.
- 海田能宏 1990 「稲作と水利」高谷好一 (編)『講座東南アジア学 第二巻 東南アジアの自然』, pp.189-214, 東京: 弘文堂.
- 柿崎一郎 1998 「鉄道整備と新たな物流の形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』no.55, pp.45-72.
- 川島知之 1997 「畜産」京都大学東南アジア研究センター (編)『事典東南アジア—風土・生態・環境』 pp.244-245, 東京: 弘文堂.
- KROMPASUSAT, Kongpasusatsamphan 2002 "Khophwnmwangsatmak khunkhakhongkasetra konthai", *Matichonbottekhnoyichauban*, vol.15 no.299, pp.86-87 (タイ語).
- 正木淳二・大島正尚 1973 「熱帯牛ゼブーの品種と特性 (2)」『畜産の研究』vol.27 no.6, pp.745-750.
- 水野浩一 1981 『タイ農村の社会組織』, 東京: 創文社.
- NRC (National Research Council) 1981 *Waterbuffalo: New Prospects for an Underutilized Animal*, Washington: National Academy Press.
- NSO (National Statistical Office) 2001 *Statistical Yearbook Thailand no. 47, 2000*, Bangkok: National Statistical Office.
- OOA (Office of Agriculture, Livestock Division, Development Support Bureau, Agency for International Development) 1979 *The Buffalo as a Draft Animal in Thailand*, n.p.: Office of Agriculture, Livestock Division, Development Support Bureau, Agency for International

Development

- PRASOB Buranamas 1963 *A Survey of Buffalo in Thailand*, Bangkok: Kasetsart University and the Kasetsart/Hawaii University Contract in cooperation with USOM/Thailand.
- PREEDA Prapertchob & PAITON Kachamart 1983 *Traditional Farming System in Northeast Thailand with Special Emphasys on the Role of Livestock*, Khon Kaen: Department of Agricultural Economics, Faculty of Agriculture, Khon Kaen University.
- RWANGSAK Lathainin 2001 "Bangmummongkiaukapkananurakkhwaithai", *Warasan Satawan*, vol.11, no.56, pp.42-45 (タイ語).
- SASAKI, M. 1994 "Progress in Asian Buffalo Production: Its Implication to Small Farmer Development", in Pakapun Bunyavejchewin (als. eds.), *Long-term Generic Improvement of the Buffalo-Proceedings of the First ABA Congress held in Khon Kaen, Thailand, during 17-21 January 1994*, pp.5-13, Bangkok: Buffalo and Beef Production Research & Development Center.
- SCHWARTZ, Sara J., & BROOKS, Douglas H. 1992 『タイの西暦2000年までの飼料産業および畜産業の予測』, 東京: 畜産振興事業団.
- 嶋田義仁 1995 『牧畜イスラーム国家の人類学』, 東京: 社会思想社.
- SUWIT Thianthong 1996 "Khwaithai: Moradokthangwathanathanlamkha khongchauthai", *Warasanthangwichakanrachaphat krungkau*, vol.2, no.4, pp.300-37 (タイ語).
- 高谷好一 1985 『東南アジアの自然と土地利用』, 東京: 勁草書房.
- 田先威和夫 1981 「タイ国の酪農環境」『畜産の研究』, vol.35 no.1, pp.193-200.
- 矢野史子 1996 「東南アジアの家畜飼養—その現状と未来—」『熱帯畜産研究会報』vol.3 no.1, pp.13-19.
- 矢野秀雄 1986 「東北タイにおける家畜使用形態と作付け体系」『国際農林業協力』no.8, pp.10-20.